

令和7年 学校総合体育大会兼全国高校総体サッカー大会 埼玉県予選 大会総評

報告者：高体連技術委員 川越南高校 久津間 岳文

1 大会概要

2025年5月31日から6月15日にかけてプレミアEAST1校、プリンス関東2部1校、県リーグ所属の20校、各支部代表20校の計42校によるノックアウト方式のトーナメントで40分ハーフ、延長20分、決着が決まらない際にはPK方式で勝者を決めるルールで実施された。今大会はプレミア所属の昌平が準々決勝からの出場となった。大会期間は悪天候の日が多く、日程変更もある中でピッチ状況が難しい中での試合が多くあった。決勝はNACK5スタジアム大宮で行われ、昌平高校が優勝で幕を閉じた。

2 大会結果

優勝 昌平高校

準優勝 西武台高校

第3位 成徳深谷高校、浦和南高校

3 大会全般

勝ち上がりからベスト8にプレミア1校（昌平）、プリンス1校（西武台）、県1部が5校（浦和南、武南、成徳深谷、聖望学園、浦和学院）、県2部が1校（市立川口）進出した。また、決勝はプレミア所属の昌平とプリンス所属の西武台のカードになったことから実力のあるチームが勝ち上がったと言える。特にインテンシティーの高いゲームが多く、ベスト4に残った昌平、西武台、成徳深谷、浦和南は個々のフィジカルの高さが際立った。守備においてフィジカルの高さを活かしてコンパクトな陣形から前線でプレッシングをかけるなどアグレッシブな戦いが多くあった。それを実現するために個々の守備強度が高く、個人で守れる選手がいるチームが勝ち上がった。攻撃ではGKを使って自陣からビルドアップするよりはロングボールから相手コートに素早く進入し、セカンドボールからの攻撃を狙うことが多く見受けられた。その中でアタッキングサードにおいて個人で違いを作れる選手がいることやプレーの質（パス、シュート、トラップ）の高さが得点に繋がった。また、ロングスローをはじめ、コーナーキックなどのデザインされたセットプレーから相手に脅威を与えるチームが多いことも特徴であった。

4 チーム分析

昌平高校

4-2-3-1が基本的なシステムである。GKからビルドアップを図る。相手の守備位置を見ながらボランチが立ち位置を変えながらスペースを上手く使って前進を試みる。両サイドMF⑦長⑩山口がハーフラインに入り、SB②安藤⑫森井がサイドラインにポジションを取る。ローテーションをうまくすることで相手のマークを外そうとしている。特に②が高い位置をとって攻撃に参加することが多く、浦和南戦でもここから得点が生まれた。停滞するとMF⑭飯島がスペースへ下がることで中盤に人数を増やすことでCBからのパスコースを増やして相手のズレを作って前進しようとする。相手を見ながらそれぞれが立ち位置を変えながら⑦⑩がアタッキングサードで仕掛けること

でゴールが生まれる。二人のゴールへ向かうドリブルは相手に脅威を与えた。MF⑬がバランスを常に取り、DFラインの前を管理して二次攻撃に繋げるなど厚みのある攻撃を行っていた。守備では相手や試合の流れからハイプレスとミドルブロックを使い分けていた。3試合で失点が0であった要因としてCB③伊藤④高橋はヘディングが強く、相手のロングボールやクロスを弾くなど守備での安定感を与えた。最終ラインではチャレンジ&カバーの意識が高く、個人で戦うだけでなくチームとしてコレクティブな守備を行っていた。その中でもGK⑯小野寺は気持ちが強く、常にチームを鼓舞しながらプレーし、ビックセーブでチームを救い、優勝へ導いた。

西武台高校

4-2-3-1、4-1-4-1など相手によってシステムや選手を変えながら、このストロングが生きる布陣を選択している。攻撃ではFW⑨青木のキープ力を生かしてロングボールから前線に起点を作り、サイドに展開することで左のMF⑪太田の推進力を生かした縦への突破と右のMF⑭滝澤のドリブルでゴールへ迫った。左右で特徴の異なるアタッカーがいることで攻撃に変化を作っていた。アタッキングサードではMF⑦広瀬が高いテクニックで攻撃にアクセントを与えていた。優先順位を意識した縦に速い攻撃は多くのチャンスを作り出したが、最後のフィニッシュの精度を欠いてしまった。中盤の選手の運動量が豊富でセカンドボールの回収や前線への素早いサポートは攻撃のリズムを作っていた。また、良い距離感でプレーができていることで攻守の切り替えが早く、ミドルサードでの人数をかける守備によって即時奪回から攻撃に繋げていた。守備ではハイプレスを基本とし、状況に応じてミドルブロックに変更するなど選手が判断して変えていた。全員がハードワークし、コンパクトな陣形から素早いプレッシングを行う。プレッシングスピードと個人で奪い切る球際の強さが強固な守備を確立している要因であった。特にキャプテンのCB⑤高倉の対人の強さと読みの良さは際立ち、⑤を中心としたゴール前の守備は素晴らしかった。

浦和南高校

基本システムは4-1-2-3で守備では4-4-2に変更する。ボール奪取から優先順位を意識した縦に速い攻撃で、FW⑩岡田が前線で起点となり、2シャドーの豊富な運動量で相手陣地へ進入する。特に⑪大塚のスピードは相手に脅威を与えたが、怪我によって準決勝に出場できなかったことは攻撃パターンが少なくなってしまった。デザインされたコーナーキックやDF③稲垣のロングスローは多くのチャンスを作った。特にDF⑤のロングスローはファーサイドまで届くなど相手に脅威を与えた。ハードワークを惜しまないマンツーマンを意識したアグレッシブな守備をチーム全体で行っていた。ゴール前ではCB2人を中心に体を張った粘り強い守備が際立った。

成徳深谷高校

3-4-1-2でスタートしたが相手との関係から4-4-2にシステム変更、メンバー変更するなど相手によって変化させる柔軟な戦い方をしていた。ロングボールで前線に起点を作りFW③頓宮の高さを活かしたロングボールからFW⑪川上のスピードを活かした抜け出しで相手陣地へ進入し、そこで得たロングスロー、デザインされたコーナーキックでチャンスを作った。特にDF②山谷のキックの質は高く、コーナーキックは相手に脅威を与えた。交代で入ったMF⑩白川がテクニックを生かして攻撃に変化を与えた。守備ではコンパクトな陣形から素早く連動してプレッシングをか

け、個人の球際の強さや対人の強さを活かした守備を行っていた。

5 最後に

どのチームも過密日程の中でハードなゲームをこなした。その中でもトーナメントで勝ち上がるために必要な固い守備とチャンスを決めきる決定力で粘り強い戦いをした昌平高校が今大会を制した。準優勝の西武台高校も最後まで昌平を苦しめる素晴らしいチームであった。

終わりに昨年のチャンピオンである昌平高校が今年も本大会で昌平高校らしいクリエイティブなフットボールで再びチャンピオンになることを期待したい。